

- 学生時代と図書館 (38) -
『図書館との関わりを振り返って』

中野 弘三

日本には、外国と比べて、自宅に本を沢山買い込んで、書斎をミニ図書館のようにすることを好む人が多いとよく聞く。私もどちらかということこの部類の人間で、公共の図書館を利用することが少ないほうである。そのような私でも、60年を越えるこれまでの人生を図書館と無縁で過ごしてきたわけではない。必要に迫られて図書館通いをする時期がこれまでに何度もあった。学生時代から今日までを振り返って、私にとっていろいろな意味で有益であった図書館通いの思い出を幾つか述べてみたい。

私の最初の図書館通いは大学受験時代で、この時期の図書館通いは図書館利用の本来の目的から外れたものであった。昭和30年代初め頃で、住宅事情が悪く自分の勉強部屋を持てなかったため、勉強部屋代わりに図書館を利用していたのであった。このような図書館利用でも有益であったことは、図書館の雰囲気である。私は図書館の辞書が沢山並べてある一角が好きで、ほとんどいつもその一角に席を取った。大きな英英辞書などを活用するほどの知識も必要も無かった受験生ではあったが、受験勉強の退屈さを紛らわせるために、いろいろ覗いてみる辞書の重々しい雰囲気にかか心を引かれるものがあった。後に英語の研究をする道を選んだのは、この時の経験が土台となっていたのかもしれない。

大学生、大学院生時代に図書館を利用したのは、主として、卒業論文、修士論文作成のためであった。まだ自分の蔵書というものがない学生時代には必要な参考文献の多くは大学の図書館から借り出すのは当然として、英語学を専攻していた私には、*The Oxford English Dictionary*を始めとする大部で高価な英英辞書を参照する必要があり、そのためにしばしば図書館に通った。

大学に職を得て、研究費や私費を使って自分の研究に関係する専門書を購入するようになってからは、論文を書くのに図書館を利用



する機会は、学生時代より少なくなった。それでも長期の海外研修に出かけたときのように、自分の書斎や研究室が使えない状況では、図書館を利用することがどうしても必要となった。私は、これまでに長期と短期の二回、アメリカのハーバード大学で研修をする機会に恵まれたが、数多くあるハーバード大学の図書館のうち、二つの図書館を主として利用し、日本では得られない貴重な体験をすることができた。一つは Harvard-Yenching Library であり、もう一つは Widener Library である。前者はアメリカで最も大きい東アジア研究のための大学図書館であり、後者はハーバード大学を代表するアメリカでも最大級の図書館である。

Harvard-Yenching Libraryに通った理由は、この図書館には日本語、日本文学に関する研究書が日本にある並の図書館より遙かに充実しており、日英語比較をテーマにして研修をしていた私にとってきわめて利用価値の高い図書館であったためである。もう一つの Widener Library はまさに大図書館であるが、私にとって大変有益であったのは、その中に、言語学の専門書だけを開架式に収めたかなりの大きさの個室があったことで、比較的人の出入りも少ないこともあり、専門の勉強をするにはもってこいの部屋であった。

この経験により、自宅でのミニ図書館のみに依存する研究態度を反省し、大学や公共の図書館の利用を可能な限り心がけるようになった。特に、最新の情報を伝える雑誌その他の定期刊行物は個人で購読するには限界があり、図書館からの借り出しや閲覧が不可欠で、それだけでも図書館の利用価値は高い。

なかの ひろぞう (教授・英語学)